

資料集(8)

ゼノン

A 生涯と学説

生涯

1

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 25 ff.）

(25) ゼノンはエレアの人。アポロドトロスが『年代記』においていうところによれば、生まれではテレウタゴラスの子であるが、養子縁組でパルメニデスの子になった（このパルメニデスはピュレスの子である）。彼とメリッソスについてティモンは次のようにいっている。

両刀論法の偉大なる力は打ち負かされることを知らぬ、
一切を咎めだてる人ゼノンのそれは。メリッソスもまた
あまたの空論に立ち勝り、おくれをとること、めったになし …。

ゼノンはパルメニデスから学んだ。そしてまた彼の稚児でもあった。また彼は、プラトンが『パルメニデス』〔127 B〕においていうところによれば、背が高かった。プラトンは『ソピステス』〔216 A〕において〈も『パイドロス』〔261 D〕においても彼に言及し、〉彼のことを「エレアのパラメデス¹」と呼んでいる。アリストテレスは、エンペドクレスが弁論術の発明者であるように、ゼノンが弁証法の発明者であるという²。

(26) 彼は哲学においても国政においても極めて気高い人物であった。事実、多くの洞察に満ちた彼の書物が伝えられている。ヘラクレイデス³が『サテュロス綱要』においていうところによれば、彼は僭主ネアルコス（他の人によれば、ディオメドン）を打倒しようとして捕らえられた。そしてその共謀者や彼がリパラ⁴に運び込んでいた武器について尋問されたとき、その僭主を孤立させようと考えて、僭主の友人の名をことごとく密告した。そしてさらにある者について耳打ちしたいことがあるからといって〔近づかせ、その耳に〕噛みつき、刺し殺されるまで放さなかつたとのことである。このようにして彼は「僭主殺し」アリストゲイトン⁵と同じ目にあったのである。(27) デメトリオス⁶は『同名人録』において、彼が噛み切ったのは鼻であったといっている。アンティステネス⁷が『哲学者の系譜』においていうところによれば、彼は〔僭主の〕友人たちの名を告げたあと、「まだ他に誰かいるか」と僭主に問われて、「國家の呪いであるお前が」といったとのことである。そして傍らにいる者たちに向かって「もし今わたしが耐えているこのことのために君たちが僭主の奴隸となつてゐるのだとすれば、君たちの臆病がわたしには不思議だ」といった。そして最後に舌を噛み切り、それを僭主に吐きかけた。それで市民たちは激昂して、ただちに僭主を打ち殺したという。大部分の人がこれとほぼ同じことを語っているが、ヘルミッポス⁸は、彼は臼の中に投げ込まれて殺されたのだといている。(28) またわれわれが彼に捧げて語るところは以下のとくである。

おおゼノンよ、汝は望めり。専制君主を倒し、エレアを隸属より解放せんと望めし
汝は立派なり。

しかしこれは倒れり。僭主が汝を捕らえて臼にて打ち砕きしがゆえに。
だがわが語れしものは何か。そは汝の体にて、汝ならず。

他の点でもゼノンは立派であったが、特筆すべきはヘラクレイトスと同じくらい権威に対して軽蔑的であったということである。というのも、以前にはヒュエレと呼ばれ、後にはエレアと呼ばれたポカイア人の植民都市⁹が彼の生国であるが、優れた人物を生み育てるすべを心得たこの質素なポリスを彼はアテナイ人の自慢する大国〔アテナイ〕よりもよしとしていたからである。アテナイを訪れたことが全くないわけではないが¹⁰、彼は生涯を生国で過ごした。(29)また彼はアキレスの議論を設問した最初の人である。パボリノス¹¹は、それはパルメニデスであって、他の多くの議論もまたそうだという。

彼の考えるところは以下のとくである。世界は〔多数〕存在するが、空虚は存在しない。万物の本性は温と冷、乾と湿からなっており、それらは互いに転化し合う。人間の発生は土からであるが、魂は上述の〔温、冷、乾、湿の〕混合である。だがその際、それらのいずれも他を圧倒し去ることはない。

彼は〔ある時〕罵られて腹を立てた。それである人が彼を非難したところ、次のようにいったといわれる。「もし罵られてもそ知らぬ風であるなら、褒められてもそれを感じないだろうからね。」

ゼノンという名の人が8人いたことはキティオンのゼノンのところで語った。彼は第79オリュンピア祭年〔前464-461年〕に盛年であった。

- 1) トロイア戦争におけるギリシア方の英雄の一人。才知に富、チェスやさいころ遊びの発明者といわれる。トロイア戦争への従軍を逃れようとしたオデュッセウスの策略を見破って彼を従軍させた。ためにオデュッセウスの恨みをかい、彼の策謀によって非業の死を遂げた。
- 2) アリストテレスの失われた著作『ソピステス』(fr.65 Ross)において。
- 3) レンボスのヘラクレイデス。エジプトのカラティス出身の政治家、歴史家。前2世紀の人。ピュタゴラスの章19の注1参照。
- 4) シケリア島の北東部に位置するリパリ諸島の主島。
- 5) 愛人のハルモディオスと団つて時のアテナイ僭主ヒッピアスの暗殺を企てたが、失敗して殺された(前514年)。しかしその事件を契機にやがてアテナイから僭主制が廃止されるにいたり、二人は「僭主殺し」として英雄視されるようになった。
- 6) マグネシアのデメトリオス。タレスの章A1の注42参照。
- 7) タレスの章A1の注44参照。
- 8) タレスの章A1の注36参照。
- 9) ハルバゴスによる攻略を前にしてポカイア人たちは故国ポカイアを捨てて海洋に出た。数年の遍歴を経て一隊はマッサリア〔マルセイユ〕にたどり着いてその地に住みつき、一隊はイタリアの南西岸にエレアを建設した。ポカイア人によるエレアの建設は前540年。
- 10) プラトン『パルメニデス』127 A-D 参照。本章A11参照。
- 11) アナクシマンドロスの章A1の注2参照。

『スーダ』（「ゼノン」の項）

ゼノンはテレウタゴラスの子でエレアの哲学者。ピュタゴラスに近い人々のひとりであるが、年代の点ではデモクリトスに近い人である。なぜなら彼は第78オリュンピア祭年〔前468-465年〕にいたからである。彼はクセノパネスないしはパルメニデスの弟子であった。『争論』『エンペドクレス注解』『哲学者たちを駁す』『自然について』などを書いた。

エンペドクレスが弁論術の発明者であるように、彼は弁証法の発明者であるとされている。また彼はエレアの僭主であったネアルコス（別の人によれば、ディオメドン）を打倒しようとして捕えられた。そして彼によって尋問されたとき、自らの舌を噛み切って僭主に吐きかけた。そして臼に投げ込まれてすり殺された。

3

エウセビオス（『年代記』）

第81オリンピア祭年の第1-3年〔前456-454年〕：ゼノンと「暗い人」ヘラクレイトスが盛年にあった。

4

擬プラトン（『アルキビアデスI』119A）

ソクラテス しかし他のアテナイ人なり外国人の中で、奴隸でも自由人でもよいが、ペリクレスとの交わりによって一段と知恵ある者になったと評判されるような者が誰かいるだろうか。いるなら、挙げてみてくれたまえ。ゼノンとの交わりによって〔そのような者になった例として〕ぼくは君にイソロコスの子ピュトドロス¹とカリアデスの子カリアス²を挙げることができるのだがね。彼らはそれぞれゼノンに100ムナ支払って知恵ある秀でた者となったのだ。

- 1) アテナイの将軍〔前425年〕。前424年に追放される。
- 2) 前5世紀のアテナイの政治家、軍人。前490年のマラトンの戦いに功を立て、ペルシアとの間にカリアスの和約を結んだ。前432年のポティダイア戦にアテナイ軍の司令官として従軍、戦死。

逸名著作家の古注（『アルキビアデスI』前掲箇所への古注）

ゼノンはエレアの人でパルメニデスの弟子。自然学者であるが、眞実にはむしろ政治家であった。それゆえに見かけの上で政治家であったペリクレスと対比されているのである。ピュトドロスはこの人の聴講者である。このピュトドロスは『パルメニデス』の中でも、アンティポン¹によることとして、かの集まりに加わっていたひとりとして言及するに値すると考えられている。クラゾメナイのケパロス²はこのアンティポンに学んで教師となったのである。

- 1) プラトンの異父弟のアンティポン。ソフィストのアンティポンではない。
- 2) クラゾメナイのケパロスという人物については、プラトンの『パルメニデス』篇に物語り者として登場する以外、不詳。

プルタルコス（『ペリクレス伝』4,5）

ペリクレスはまたエレアのゼノンの講義も聴いた。この人はパルメニデスのように自然について研究していたが、問答によって相手をアポリアに陥れる争論術の技も修練していたのである。

5

アリストテレス（『弁論術』A 12. 1372 b 3）

また反対に、その不当行為がある意味で称賛すべきものとなる場合。例えばゼノンの場合のように、不当行為が同時に父親ないし母親の仇討となるような場合。

3

ディオドロス（『世界史』X 18,2）

祖国がネアルコスによって苛酷に支配されるところとなつたため、僭主に対する陰謀を彼〔ゼノン〕は企てた。だがそれは露見するところとなり、拷問の責め苦をもつて一味の者は誰かネアルコスによって詰問されたとき、「舌の支配者であるように、身体に関してもまたそうでありたいものだ」と彼はいった。僭主はさらに拷問具で絞めあげたが、ゼノンはまだしばらくは耐えていた。その後、責め苦から解放されると同時にネアルコスに復讐することを願つて次のようなことを企てた。拷問具が最大限絞めあげられる中、魂が苦しみに屈服したかのように裝つて、「ゆるめてくれ。真実をすべて話すから」と彼は叫んだ。それで彼らがゆるめると、近寄つて私的に聴くように彼は僭主に求めた。内密にした方がよい多くのことがこれからいうことの内にはあるからと。僭主が喜んで近寄り、耳を口元に寄せたとき、ゼノンは口を大きくあけて権力者の耳を歯に噛み入れた。家来たちがあわてて走り寄つて、拷問を加えることでその歯をゆるめさせようとあらゆる救援の手段を講じたが、彼はさらに一段と噛み締めるばかりであった。遂に彼らはその男の果敢さに打ち勝つことができず、歯を離させるために彼を刺し殺した。こういった奸計によつて彼は苦しみから解放され、かつ僭主に対してなしうる限りの復讐をなし遂げたのである。

プルタルコス（『コロテス論駁』32 p.1126 D）

ところでパルメニデスの知人のゼノンは、僭主デミュロスに陰謀を企て、実行に関しては不運であったが、火の責め苦の中にあって彼はパルメニデスの教えが純金のごときもの、信頼に足るものであることを示したのであって、子供や女や女のような魂を持つ男どもは苦痛を恐れるが、大なる男にとっては恥辱こそが恐れの対象であることを行ふによって示したのである。すなわち彼は自分の舌を噛み切つて、僭主に吐きかけた。

クレメンス（『雑録集』IV 57）

エラトステネス¹が『善人と悪人について』の中でいっているように、アイソポス人（？）やマケドニア人やラコニア人は拷問にかけられても毅然として耐えたが、彼らのみならず、エレアのゼノンも秘密を明かすよう強いられたとき、その拷問に耐えて何ひとつ白状しなかつた。少なくとも彼は死に瀕しながらも舌を噛み切り、僭主に吐きかけた。その僭主をある人はネアルコスであるといい、ある人はデミュロスであるといつてゐる。

1) キュレネ出身の文献学者、天文地理学者。前276—196年頃。アンクシマンドロスの章A 6 「ストラボン」の注1参照。

ピロストラトス（『アポロニオス伝』VII 2）

ところでエレアのゼノンは（弁証法は彼が始めたと考えられている）ミュシア¹のネアルコスの專制政治を打倒しようとして捕えられた。そして拷問にかけられたが、自分の仲間はこれを秘密にし、むしろ僭主に忠実であった者たちを「彼らは裏切っている」といつて欺いた。それでこれらの者たちが罪ありとされ、その咎で処刑された。このようにして専制政治が自ら躓いて、ミュシアの人々に解放をもたらしたのである。

1) エレアとエライアが取り違えられたのであろう。エライアは小アジアのビテュニアのポリスで、

ミュシアに隣接する。

10

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』VIII 57）

アリストテレスは『ソピステス』¹において、エンペドクレスが初めて弁論術を発見し、ゼノンが初めて弁証法を発見したといっている。

1) この書は伝わらない。アリストテレスの断片 6 5 (Ross)。

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VII 6）

パルメニデスが弁証法に無知であったとは考えられないであろう。というのも、アリストテレスは彼の知人であるゼノンが弁証法の創始者であると想定しているからである。

著 作

11

プラトン（『パルメニデス』127 A - D）

さて、アンティポンのいうところによると、ピュトドロス¹は次のように語ったとのことである。かつてパンアテナイ大祭にゼノンとパルメニデスがやってきたが、その時パルメニデスはもうたいへんな高齢で、髪はすっかり白くなっていた。しかしその容姿は美しく上品で、歳はおよそ 65 歳ぐらいであった。他方ゼノンはその時 40 歳近くで、背が高く、見るからに優美であった。また彼はパルメニデスのお稚児さんであるといわれていたという。アンティポンのいうには、彼らは城壁の外のケラマイコスにあるピュトドロスのところに旅装を解いていたのである。それでそこへソクラテスと、また彼と一緒に他の多くの人々がゼノンの書物を聞きたいと思ってやってきていたという次第である。というのは、その書物はその時初めて彼らによってもたらされたのだからである。しかしその時、ソクラテスは非常に若かった。さて、彼らのためにゼノン自身が朗読したのであるが、パルメニデスはちょうど外出中であった。そしてピュトドロスのいうところによると、彼とパルメニデスと 30 人執政官のひとりとなったアリストテレスが一緒に外から帰ってきたときには、論文の朗読は残りわずかになっていて、書物の小部分しか聞くことができなかつたとのことである。

1) アンティポン、ピュトドロスについては、パルメニデスの章 A 5 の注 1, 2 参照。

アテナイオス（『食卓の賢人たち』XI 505 F）

またその同国人であるゼノンがパルメニデスの稚児であったなどと何の必要もないのにいうということは、およそすべての中で最も忌まわしく、〈最も欺瞞的なこと〉である。

12

プラトン（『パルメニデス』128 B - E）

「そうだよ、ソクラテス」とゼノンはいった。「だが君はこの書の真実のところをすべての面において感じ取っているというわけではないのだ。たしかに君は、ラコニアの大よろしく、語られているところをよく追跡し、嗅ぎ分けているがね。しかし第一に君は次のこと気にづいていない。すなわちこの書は君のいうような考え方から書かれていて、人々には何か大それたことをなし遂げたものでも

あるかのように秘密にするというような、そのような勿体をつけるものではまったくないということだ。君はこの書に付隨することのひとつをいっているのであって、眞実にはこの書はパルメニデス説への援護なのだ。すなわち、もし〔存在を〕一であるとするなら、多くの笑うべきこと、自分に矛盾することがその説には降り掛かることになるとして、それを笑いものにしようと企てる者たちに対して、パルメニデス説を援護するものなのだ。そこでこの書は多を語る者たちに対して反論を語ることになる。そして同じだけのお返しを、いや一層多くのお返しをするのだ。すなわち、この書は、多があるという彼らの仮説の方が、仔細に検討してみるなら、一であるという仮説よりさらに一層笑うべきことを招来するということを示さんとするものなのである。つまりこのような対抗心によってぼくはまだ若かった時にこれを書いたのであるが、誰かがこれを書き写して盗んでしまったのだ。その結果、これを公にすべきかどうか考慮することすら許されないというようなことになってしまったのである。だから、ソクラテスよ、この点で君は見落としているわけだ。若者の対抗心によってこれが書かれたとは君は考えないで、年配者の名誉心によって書かれたと考えているのだからね。とはいって、今もいったように、君の推測はまずくはなかったよ。」

13

プラトン（『パайдロス』261 D）

ところでエレアのパラメデス¹〔ゼノンのこと〕が、その技術を駆使して、同じものが聞く者に同じようでもあれば同じようでもなく、ひとつでもあれば多でもあり、静止してもおれば動いてもいると思われるよう語るのを、われわれは知らないだろうか。

1) パラメデスについては、本章A 1 の注1参照。

14

アリストテレス（『詭弁論駁論』10. 170 b 19）

そこで、もし人が、問う者も問われる者も、名辞が多くの意味を有しているのに、ひとつのことしか意味しないと考えるなら、例えば存在や一はおそらく多くの意味を有しているのに、答え手も問い合わせのゼノンもひとつの意味しかないと考えて問い合わせを立て、そして「すべては一である」といった議論を成立させるような場合がそれであるが、〔そのような場合には〕議論が向けられているのは問われている人の思考であるよりは、むしろ名辞であるだろう。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』III 48）

ところで、対話篇を初めて書いたのはエレアのゼノンであるといわれている。だがアリストテレスは『詩人について』第1巻において、それは〔エウボイアの〕ステュラの人かもしくはテオスの人であったアレクサメノス¹であるとしている。

1) 不詳。

15

プロクロス（『プラトン「パルメニデス」注解』p.694,23 [127 D への注解]）

ゼノンによって述べられた多くの議論（それは全部で40篇になる）の中から最初のひとつをソクラテスは取り上げているが、それは次のように問うものである。…もし存在が多であるなら、同じ

ものが似ていると同時に似ていないことになる。だがしかし同じものが似ていると同時に似ていないことは不可能である。したがって存在は多ではない。

エリアス（『アリストテレス「カテゴリー論」注解』109,6）

キティオンのゼノン¹はそうであるが、エレアのゼノン、すなわちパルメニデスの弟子であったゼノンは、キティオンのゼノンがそうであったような弁証家であったために、すなわち同じものを覆すと同時に樹立するといった弁証家であったがために、両刀論法者と呼ばれたのではなく、そのいうところと考えているところが異なるといった生き方における弁証家であったために、そう呼ばれたのである。なぜなら彼はある時、僭主によってその専制政治に対して陰謀を企てている首謀者は誰か問われたとき、護衛の者たちを指し示したからである。僭主はそのことを信じ、彼らを取り除かんと殺させた。すなわち彼は僭主を取り除くためであれば、嘘をつくことをよいことであると考えたのである。かつて彼は、見た目には存在は多であるが、形相の面から見れば一であると語った自身の師のパルメニデスを擁護するために、存在が一であることを示す証明を40の弁証法的議論から組み立てた。自身の師に助勢することをよいことであると考えたのである。またさらに存在は不動であると語る同じ師を弁護して、5つの弁証法的議論によって存在が不動であることを彼は証明した。これに反論することができなかつたキュニコス派のアンティステネス²は立ち上がって歩いて歩いてみせた。言葉による反論より行為による証明の方が有効であるとアンティステネスは考えたのである。

- 1) ストア学派開祖のゼノン。
- 2) ソクラテス学徒の一人。前455—360年頃。ソクラテスの徳の概念を実践において追求した。一切の持ち物を捨て、艱難辛苦の乞食僧のような生き方の中に徳を求めたのである。キュニコス派〔犬儒学派〕の開祖。樽の中で生活していたといわれるシノペのディオゲネスはこのアンティステネスの弟子。

警句

16

エウデモス（『自然学』断片7 [シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』97,12 より]）

またゼノンは「もし人がわたしに一が何であるかを説明しきれるなら、多なるものが何であるか語ることができるだろう」といったといわれる。

17

プルタルコス（『ペリクレス伝』5,3）

ペリクレスの尊大さを名声欲と高慢さの表れだといった人々に対して、ゼノンは彼らもまたそういった名声欲を持つように勧めた。というのは、立派なことを装っていると、知らぬ間にそのような高上心や、そういたことを行なう習慣が身につくものだからというのである。

18

ピロン（『優れた人はすべて自由であるということ』14 [II 460 M.]）

ところで、このような主張や考えに対しては、「真面目な人に望みもしないことをその意に反して

無理矢理やらせるよりも、空気の一杯詰まった革袋を水に沈める方が手っ取り早い」といったゼノンの言葉を引き合いに出すことができるのではなかろうか。

19

テルトゥリアヌス（『護教論』50）

エレアのゼノンは、哲学は一体何を授けることができるかとディオニュシオス¹に訊ねられて、「死の軽視を」と答えていたが、僭主の鞭にさらされても冷静さを持し、死にいたるまでその見解を示しつづけたのである。

- 1) シュラクサイの僭主ディオニュシオス1世(前405－367年在位)を念頭に置いて語られているのであろうが、年代的に少し厳しいようである。

20

ストバイオス（『精華集』III 7,37）

エレアのゼノンは一味の者たちを自白するように拷問にかけられたが、「そういった者がいたというのなら、お前は僭主〔暴君〕だったということか」と答えた。

学 説

21

アリストテレス（『形而上学』B 4. 1001 b 7）

さらに一それ自体が不可分であるなら、ゼノンの要請によれば、それは何ものでもないもの〔無〕となろう。なぜなら付け加えても取り去っても大きくも小さくもしないもの、そのようなものは存在に属さないと彼はいうからである。存在するものとは明らかに大きさあるものだからである。そして大きさがあるなら、それは物体〔立体〕である。というのは、それはあらゆる面において〔すべての次元において〕存在するものだからである。だが他のもの、例えば面や線は、ある仕方で付加されると大きくするが、別の仕方で付加されると大きくしない。点や単位はどのような仕方で付加されても大きくしない。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』97,13）

思うに、彼〔ゼノン〕が問題としたのは、感覚される物体のいづれによっても多が定言的に語られるし、また分割によてもそうであるが、点はどのような一も定立しないということであろう。なぜなら付け加えられても増しもせず、取り去られても減らしもしないものは、存在に属さないと彼は考えたからである。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』99,10）

ここではしかし、エウデモス¹のいうところによれば、彼〔ゼノン〕は一を否定し（というのは、彼は点を一の意味で語っているからである）、多の存在は容認しているのである。しかしながらアレクサンドロス²は、ここでもエウデモスはゼノンのことを「多を否定する人」として言及していると考えている。「なぜならエウデモスの伝えるところによれば、パルメニデスの知人のゼノンは、存在するものの内にはどのような一もないということによって、そして多とは一なるものの集合に他なら

ないということによって、多なる存在のありえないことを示そうと試みたからである。」しかし実際にはゼノンのことを「多を否定する人」としてエウデモスが言及したのでないことは、彼自身の語り方から明らかである。ゼノンの書物にはアレクサンドロスのいうような弁証法的議論のどのようなものも記載されていないようにわたしには思われる。

- 1) ペリパトス派の哲学者。アリストテレスの直弟子。タレスの章A 1 の注6参照。
- 2) アプロディシアスのアレクサンドロス。クセノパネスの章A 3 1 の注2参照。

ピロポノス（『アリストテレス「自然学」注解』42,9）

なぜならエレアのゼノンは、彼の師のパルメニデスの「存在は一である」とする説を笑いものにする人たちに対して師の説を弁護し、多が存在の内にあることの不可能なることを示そうと試みたからである。彼はいう、「もし多があるなら、多は多くの一からなるのであるから、多くの一がなければならず、そしてそれらから多は構成されているのでなければならない。そこでもしわれわれが多くの一のあることの不可能なることを示すならば、多のあることも不可能であることが明らかとなろう。しかるに、もし多があることが不可能であり、しかも一であるか多であるかでなければならないとすれば、多でありえない以上、残るところは一でしかないことになる … 」。

セネカ（『書簡集』88,44）

パルメニデスはあると思われるものの何ものも世界にはあらぬという。エレアのゼノンはそういう観点すら捨て去ることによって、一切の面倒を取り去った。彼は何ものもあらぬという。… パルメニデスを信ずれば、一以外には何も存在しない。ゼノンを信ずれば、その一すら存在しない。

22

擬アリストテレス（『不可分の線について』 968 a 18）

さらにゼノンの議論によれば、部分のない大きさといったものがなければならない。いやしくもそれぞれに触れる場合、限られた時間内に無限数のものに触ることは不可能であるとするならばである。運動するものは最初にその半分の点に達しなければならないが、部分のないもので限り、必ずやその半分があるからである。

アリストテレス（『自然学』A 3. 187 a 1）

ある人たちはその双方の論に対して次のように対処した。一方の … すべては一であるという論に対しては、あらぬものもあるとすることによって。他方の二分割からする論に対しては、不可分の大きさがあるとすることによって。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』138,3）

第二の論はゼノンの二分割からする議論であるとアレクサンドロスはいっている。… この二分割に関する議論にはカルケドンのクセノクラテス¹が、分割しうるものはすべて多である（なぜなら部分は全体とは異なるから）ことを示すことによって対処したと彼〔アレクサンドロス〕はいう。… すなわち不可分の線といったものがあるのであって、それについては、それらが多であるというのはもはや真でないと〔クセノクラテスはいうのである〕。

1) 哲学者、前395年頃-314年。プラトンの忠実な弟子。第3代目アカデメイア学頭。彼の時代にアカデメイアはピュタゴラス的傾向を一層強めた。

23

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』134,2）

その双方の論、すなわちパルメニデスの上述の議論とゼノンの議論には幾人かの人が対処したと彼[アリストテレス]はいう。そしてこのゼノンは、もし〔存在を〕一とするなら多くの笑うべきことが結果し、その論に反することを〔自ら〕語る羽目になるとして、パルメニデスの議論を笑いものにしようと企てる人々に対抗してパルメニデスの論を援護しようとしたのであって、すなわちゼノンは「多がある」と語る彼らの仮説の方が、それを仔細に検討してみるなら、一であるという仮設よりさらに一層笑うべき羽目に陥るということを示してみせたのである。

擬フルタルコス（『雑録集』5 [Dox.581]）

エレアのゼノンは彼独自の説としては何も提出しなかったが、それら〔パルメニデスが問題としたもの〕について一層広範に問題とした。

24

アリストテレス（『自然学』Δ 3. 210 b 22）

ゼノンが難問としたこと、すなわち「もし場所が何ものかであるなら、それは何ものかの内にあることになろう」ということは、解決するに難しくない。というのは、最初にいわれた場所が他のものの内にあっても、何ら差し支えないからである。とはいって、それは前述のような場所の内にあるという意味においてではないが…。

アリストテレス（『自然学』Δ 1. 209 a 23）

というのは、ゼノンの難問が何らかの説明を求めるからである。すなわち存在するものすべてが場所の内にあるなら、その場所の場所があることになり、かくて明らかに無限につづけて行かねばならなくなるからである。

エウデモス（『自然学』断片42 [シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』563,17 より]）

そのゼノンの難問もまた同じところに導くように思われる。なぜならそれは存在するものはすべてどこかにあることを主張するものだからである。ところで場所も存在するもののひとつであるなら、それも何処にあるのであろうか。然り、他の場所の内にであり、そしてその場所もまた他の場所の内にあり、このようにして無限につづいて行く。…ゼノンに対してわれわれは、何処はさまざまな意味で語られると主張しよう。ところで存在するものは〔すべて〕場所の内にあらねばならないと彼は主張したわけであるが、正しく主張したとはいえない。なぜなら健康や勇気や、その他無数のものを場所の内にあるとは人はいわないであろうからである。それらのものについていわれるような場所は実際何ら場所ではないのである。だが何処が別の意味でいわれているのなら、場所もまたどこかにあることになろう。なぜなら物の限界が物の何処だからである。すなわちそれぞれのものの端がそれに他ならない。

アリストテレス（『自然学』Z 9. 239 b 9）

運動に関するゼノンの議論は四つあって、それらはそれを解決しようとする人々に困惑を与える。第一の議論は、運動するものは終点にいたる前にまずその半分の点にまでいたらねばならないがゆえに運動することはできないというものであって、これについては先の議論において論じた。それゆえゼノンの議論もまた、限られた時間内に無限の点を通過することはできないし、また無限の点にひとつひとつ触れて行くこともできないという誤った仮定の上に立っているのである。なぜなら長さにしても時間にしても、また一般に連續するものはすべて二通りの意味で無限といわれるからである。すなわち分割についていわれるか、端ということについていわれるかである。ところで量の観点においては限られた時間内に無限の点に触ることはできないが、分割の観点においては触れることができる。なぜならこの意味では時間そのものもまた無限なものだからである。したがって無限なものを限られたものにおいてではなく、無限なものにおいて通過することになるし、また無限なものに限られたものによってではなく、無限なものによって触れるということになるのである。

アリストテレス（『トピカ』Θ 8. 160 b 7）

というのも、一般的の見解に反する多くの議論をわれわれは有しているのであって、運動することも一スタディオン¹を通過することもできないというゼノンの議論がそういったものである。

1) 古代ギリシアにおける最も大きい距離の単位。1スタディオンはおよそ180メートル。

アリストテレス（『自然学』Z 9. 239 b 14）

第二のはいわゆるアキレウスの議論であって、これは足の最も遅い走者も最も速い走者によって追い抜かれることは決してないであろうというものである。なぜなら追いかける者はまず最初に走り去る者がそこから走り始めたところまで行かねばならず、したがって足の遅い者が常に少しは先んずること必然だからである。これもまた二分割による議論と同じ論であるが、次々と取り上げられて行く大きさが二つに分割されるのでない点が異なる。

アリストテレス（『自然学』Z 9. 239 b 30）

第三の議論は今しがた述べられたもので、飛んでいる矢は飛んでいないというものである。これは時間を諸々の今からなると仮定するところから生まれるものであって、このことが認められなければ、この論はなり立たない。

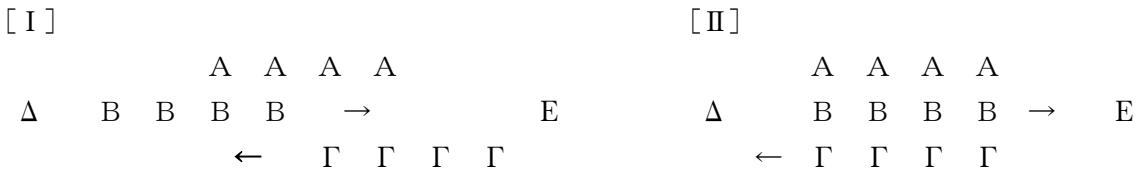
[参照] アリストテレス（『自然学』Z 9. 239 b 5）

ゼノンは誤謬推理しているのである。なぜなら、常にすべてのものは静止しているか運動しているかであるが、同一場所にあるときには物は運動しておらないとするなら、そして動いているものも常に今においてあるが、今においてはすべてが同一場所にあるとするなら、飛んでいる矢は動いていないことになると彼はいうからである。

アリストテレス（『自然学』Z 9. 239 b 33）

第四の議論は、等しい数の物体〔の列〕の傍らを反対方向から、すなわち一方は競技場の終点から、他方は中間点から、等しい速さで運動する等しい数の物体〔の二つの列〕に関するものであって、そこでは半分の時間がその二倍の時間に等しいことになると彼は考える。この誤謬推理は、運動するものの傍らでも静止するものの傍らでも、等しい大きさは、等しい速さであれば、等しい時間で移動すると主張する点にあるのである。だがこれは偽である。例えば静止する等しい数の物体〔の列〕をA Aとし、A Aの中間点から出発する数の点でも大きさの点でもそれに等しい物体〔の列〕をB Bとし、その端から出発し、数の点でも大きさの点でもそれに等しく、かつ速さもB Bに等しい物体〔の列〕をΓ Γとせよ。それでそれらが互いの傍らを運動するとすれば、先頭のBが端にあると同時に先頭のΓも端にあることになる。だがΓはすべてのBの傍らを通過しあえているが、Bは半分のAしか通過しておらず、したがって時間は半分であることになる。なぜなら双方ともそれぞれの傍らでは等しいからである。だが同時にBはすべてのΓの傍らを通過したことになる。なぜなら先頭のΓと先頭のBは同時に反対の端にあるであろうから。それで彼のいうところによれば、Aの各々との対比において生じたのとまさに等しい時間がBの各々との対比においても生じたことになる。Aとの対比においては両方とも等しい時間が生じているがゆえに¹。

1) 以上の議論をアレクサンドロスの図解によって示せば、次のようにだろう。



Aの列は静止しており、Bの列はΔからEに向かって運動し、Γの列はEからΔに向かって運動しているとする。Δはスタート地点、Eはゴール地点。[I]は次の瞬間には[II]のようになろう。その時Bの列はAの列に対してAAしか行っていないが、Γの列はBの列に対してB B B B行っていることになる。ところで速度が等しいとき、走った距離は時間に比例する。したがって二倍の時間がその半分の時間と等しいことになるというもの。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』1019,32）

したがって議論はかくのごとくであるが、これは、エウデモスもいうように、明らかな誤謬推理を含むがゆえに全く馬鹿げている。…なぜなら互いに反対方向に運動する等速度のものは、静止するものの傍らを運動するものが半分の距離を行くのと同じ時間に、たとえ後者が前者と等速度であっても、その二倍の距離を行くからである。

アリストテレス（『自然学』H 5. 250 b 19）

それゆえにキビ粒のいかにわずかな部分でも音を立てるというゼノンの議論は真でない。なぜなら1メディムノス¹の全体が落下の際に動かした空気をその一部はほんのわずかな時間も動かさないとして、何の差し支えがあろうか。

1) 穀量の単位。1メディムノスは約52リットル。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』1108,18）

これによって彼〔アリストテレス〕はエレアのゼノンがソピストのプロタゴラスに質問した議論を解決しているのである。ゼノンはいった。「プロタゴラスよ、ぼくにいってくれたまえ。一粒のキビとか1000万分の1のキビは下に落ちたとき音を立てるだろうか。」「立てない」と相手が答えたので、彼はさらにいった。「1メディムノスのキビは下に落ちたとき音を立てるだろうか、それとも立てないだろうか。」「1メディムノスなら音を立てる」と相手は答えたので、ゼノンはいった。

「それではどうだろうか。1メディムノスのキビと一粒とか一粒の1000万分の1のキビとの間には比がないだろうか。」「ある」と相手は答えたので、ゼノンはいった。「それではどうだろう。音に関してもまたそれら相互の間に同じ比があるのではなかろうか。というのは、音を立てるものに応じて音もまたあるのだから。このことが事実このようであるとすれば、もし1メディムノスのキビが音を立てるのであれば、一粒のキビも1000万分の1のキビも音を立てることになるのではないかな。」ゼノンの問い合わせた議論はこのようにものであった。

30

アエティオス（『学説誌』I 7,27 [Dox.303]）

メリッソスとゼノンは〔神は〕一にして全体なるものであるとした。そして一なるもののみが永遠で無限であるとした。

B 著者断片

ゼノンの『自然について』

1

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』140,34）

最初に彼は大きさに関して〔それが限りなく大になるということを〕同じ弁証法的議論によって〔証明した〕。すなわち「存在するものが大きさを有さないとするなら、それはおよそ存在しないことになろう」ということをまず示した上で、彼は次のようにつづける。「もし存在するなら、各々のものはある大きさと厚みを有さねばならず、またある部分は別の部分から隔たっていかなければならぬ。そしてその前にある部分についてもこれと同じことがいえる。なぜならそれもまた大きさを有するであろうし、そしてその前にもまたある部分があるであろうから。ところでこのことは、一度いうなら、同様のことを繰り返しうことができる。なぜならそのこういった部分のいずれも最外端ではないであろうし、またある部分に対して別の部分が〔もはや〕存在しないということもなかろうからである。かくして、もしそれが多であるなら、同じものが小であると共に大であらねばならないことになる。小といえば、大きさを有さないほどに小さく、大といえば、際限がないほどに大でなければならない。」

2

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』139,5）

とはいって、彼の著作には多くの弁証法的議論が含まれており、そのそれぞれによって彼は「多がある」と語る人々は矛盾したことを語ることになるということを示している。そのひとつは、「もし多があるなら〔もしそれが多であるなら〕、それは大きくもあれば小さくもあることになる。大きいと

いえば、その大きさが際限ないほどに大であり、小さいといえば、いかなる大きさも有さないほどに小であることになる」ということを示す弁証法的議論であるが、この議論において彼は大きさも厚さも嵩も有さぬものはおよそ存在するとはいえないということを示しているのである。彼はいう、「なぜならそういったものが他の存在するものに付け加わったとしても、それは少しも大きくすることはなかろうからである。というのも、それはどのような大きさも有さないのであるから、付け加わったとしても、大きさに何も付け加えることができないであろうから。かくしてすでにこれによって付け加わるものは何ものでもないということになろう。だが、取り去られても他のものが少しも小さくならず、付け加わっても少しも増大させないとするなら、付け加わったものも取り去られたものも何ものでもなかったことは明らかである。」これらのことを見ると、ゼノンは一を否定することによって語っているのではなく、多なるもの、無限なるもののいずれの部分も大きさを有するということによって語っているのである。というのは、取り上げられる部分の前には、無限に分割されて行くことによって常に何ものかがあるからである。また彼は多なるもののいずれの部分も自らと同一であるがゆえに何ものも大きさを有さないということを予め証明した上で、そのことを示しているのである。

3

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』140,27）

そしてなぜ多を語らねばならないのか。このこともまたゼノンの同書の内に語られている。なぜなら彼はまた再び、もし多があるなら〔もしそれが多であるなら〕、同じものが有限であると共に無限であらねばならないことになるということを証明しているからである。文字通りにはゼノンはそれを次のように書き記している。

「もし多があるなら、それらはある数だけあり、それより多くも少なくもないでなければならぬ。だがある数だけあるのであるなら、それは有限であることになろう。

もし多があるなら〔もし多であるなら〕、有るものは無限である。なぜなら有るものの中には常に他のものがあり、それらの間にもまた再び他のものがある。このようにして有るものは無限であることになる。」このように多さに関する無限性を彼は二分割法によって示した。

4

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 72）

それにもかかわらずクセノパネスもエレアのゼノンもデモクリトスも彼ら〔ピュロン主義者〕と懷疑論者という点では一致しているのである。… ゼノンは「運動するものは、その場所でも、あらぬ場所でも、運動していない」と語ることによって運動を否定している。

5

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』562,3）

アリストテレスによれば、ゼノンの議論は以下のように問うことによって場所の存在を否定しようとするものである。「もし場所があるなら、それは何ものかの内にあるであろう。なぜならすべてのものは何ものかの内にあるのであるから。しかるに何ものかの内にあるということは場所の内にあるということである。したがって場所もまた場所の内にあることになり、このことは無限につづく。そ

れゆえ場所といったものは存在しない。」